新入生の現状と導入教育の一考察

―日本文学・文化専攻のFDへの取り組み―

中　村　一　夫

1　はじめに

これまでとはまったく違う環境の中で学習や生活を行うようになる新入生のことを、私たちはどれだけ理解しているのだろうか。また彼らはどのような思いで、あるいは意欲を持って、大学に進学してきているのだろうか。本稿では、日本文学・文化専攻が新入生の現状を知るために行っているアンケート調査の結果と、2008年度より開講している１年次生への導入教育「日本文学・文化入門Ａ・Ｂ」についての報告を行う。

2　入学時のアンケートによる意識調査

日本文学・文化専攻では、2011年度から入学時に「新入生アンケート」を取るようにしている。これは学生たちが大学に対してどのような考えを持って入学しているのかという、４年間の生活のありようを見通すうえで重要な参考資料となるものである。2011年度は76名（男29・女47)、2012年度は75名（男47・女28)の回答があった（回収率はともに95％以上)。各設問とも複数回答可としている。まずはこのアンケート結果をもとにして、この２年間の新入生の意識を整理することにする。ここからカリキュラムや年間の行事などをいかに組み上げるかのヒントが得られると思われる。

日本文学・文化専攻新入生アンケート　結果（2011年・2012年）

1　あなたはどういう理由で国士舘大学を選びましたか。

2011	男	女	合計	2012	男	女	合計	11男	12男	11女	12女
自分の成績を考えて	16	25	41		18	16	34	55.2%	38.3%	53.2%	57.1%
他大学との併願の状況（入試結果）から	17	29	46		23	12	35	58.6%	48.9%	61.7%	42.9%
理念や校風に魅力がある	3	7	10		4	2	6	10.3%	8.5%	14.9%	7.1%
教授や講師に魅力的な人がいる	0	5	5		0	2	2	0.0%	0.0%	10.6%	7.1%
卒業後の進路（資格取得・職種）から	4	3	7		6	2	8	13.8%	12.8%	6.4%	7.1%
立地条件がよい	4	6	10		5	7	12	13.8%	10.6%	12.8%	25.0%
大学の学習環境（施設やカリキュラム）が充実している	1	8	9		2	1	3	3.4%	4.3%	17.0%	3.6%
クラブやサークル活動が活発である	2	1	3		1	0	1	6.9%	2.1%	2.1%	0.0%
卒業生や在学生に知り合いがいる	3	7	10		2	5	7	10.3%	4.3%	14.9%	17.9%
その他	1	1	2		6	0	6	3.4%	12.8%	2.1%	0.0%

国士舘大学を選んだ理由として男女ともに最も多いのは、「自らの成績を考えて」というものである。さらにこれに続くのが、「他大学との併願の状況（入試結果）から」であった。いずれも極めて現実的な理由と言えようが、この結果は、国士舘大学を主体的に選び取ろうとする学生が必ずしも多くないという事実を端的に示している。学生から選ばれる理由が、単に学力レベルにだけあるならば、彼らの環境や条件が変われば、この大学、学部、専攻が選ばれる理由はもはやどこにもないという不幸な結果となる。逆に大学（学部・専攻）自体の魅力であるべき「理念や校風に魅力がある」「教授や講師に魅力的な人がいる」という項目の数値が低いことは、同じ根から来ていることと解することができるだろう。大学としての唯一無二の魅力や訴求力に欠けていることが、いみじくも明らかになっている。売りのひとつであろう「クラブやサークル活動が活発である」という項目も、文学部（日本文学・文化専攻）に来る学生にはほとんど魅力としては捉えられていない。受験生に大学の魅力としてアピールするものがなければ、向学心（さらに将来的に醸成される愛校心）のある学生を安定して獲得することは難しいと思われる。34号館が完成した折には、その効果からか、受験生が増加したが、「大学の学習環境（施設やカリキュラム）が充実している」という項目を選択した学生も少なくなってしまった。これもカンフル剤としての効果の薄れてきたことをうかがわせている。箱物の賞味期限切れは案外早くやってきたというべきか。

一方、立地条件については、特に女子の数値が上昇している。世田谷での一貫教育や新宿、渋谷への利便性は本学のセールスポイントであったが、これらへの志向はますます強まったのかもしれない。とりわけこの点に関連して、昨年の東日本大震災以降、首都圏での地震や大規模災害への不安、原発問題などが高校生の大学選択に大きな影を落としているとおぼしい。実際に2012年度は遠方からの入学生がそれまでよりも減っており、今後しばらくは関東圏以外からの受験生、

入学生をいかに獲得するかが大きな課題となるだろう。12年度の男子の「その他」が大きく増えているのは、指定校の枠で入れるからというものであった。

2　国士舘大学のことを何で知りましたか。あるいは何で調べましたか。受験に際して参考になったものを選んでください。

2011	男	女	合計	2012	男	女	合計	11男	12男	11女	12女
大学案内パンフレット	7	19	26		14	14	28	24.1%	29.8%	40.4%	50.0%
大学ホームページ	9	17	26		12	13	25	31.0%	25.5%	36.2%	46.4%
オープンキャンパス	7	12	19		6	11	17	24.1%	12.8%	25.5%	39.3%
進学情報サイト	2	12	14		10	3	13	6.9%	21.3%	25.5%	10.7%
進学情報誌（含む受験雑誌）	7	5	12		5	2	7	24.1%	10.6%	10.6%	7.1%
高校の進路指導	10	8	18		13	6	19	34.5%	27.7%	17.0%	21.4%
その他	3	4	7		7	3	10	10.3%	14.9%	8.5%	10.7%

次の設問２の「国士舘大学のことを何で知りましたか。あるいは何で調べましたか」は、国士舘大学や文学部に関心を持った受験生が、何を入り口として情報を得ようとしているかについての質問である。女子が「大学案内パンフレット」「大学ホームページ」「オープンキャパス」などで、自ら情報を得ようとしているのに対し、男子は「高校の進路指導」や「その他」（親・先輩・友人などの勧め）が相対的に多い。これは設問１で少ないながらも女子の方が校風や教授・講師陣への興味、関心をより持っていたことと連動する結果である。進路選択において、先達の言葉に従うことはもちろん大切であるが、自ら情報収集し、これについて主体的に考えるということ、さらには大学の実質的な部分への関心の有無というのは、入学後の学習への取り組みや生活のありようにも大きく影響するところであるのは言うまでもない。「進学情報サイト」で調べるという項目は男子が多くなっているが、女子に多い「オープンキャンパス」と裏返しの結果になっているのが興味深い。在宅ですませるか、外に出て行くかの差というところか。

3　あなたはなぜ日本文学・文化専攻を選びましたか。

2011	男	女	合計	2012	男	女	合計	11男	12男	11女	12女
日本の文化に興味や関心がある	15	29	44		16	13	29	51.7%	34.0%	61.7%	46.4%
日本の近現代文学に興味や関心がある	13	20	33		16	9	25	44.8%	34.0%	42.6%	32.1%
日本の古典文学に興味や関心がある	5	15	20		5	6	11	17.2%	10.6%	31.9%	21.4%
国語という教科そのものが好きである	14	25	39		20	14	34	48.3%	42.6%	53.2%	50.0%
自分の目指す進路や職業と関係が深い	8	10	18		22	9	31	27.6%	46.8%	21.3%	32.1%
理科系は苦手だから	4	8	12		21	6	27	13.8%	44.7%	17.0%	21.4%
特に明確な将来の構想はなく、なんとなく決めた	4	0	4		2	2	4	13.8%	4.3%	0.0%	7.1%
その他	0	0	0		2	0	2	0.0%	4.3%	0.0%	0.0%

設問３では大学で勉強する専門に関わる点について尋ねている。専攻としては日本文学や日本語、さらにそれを取り巻く日本の文化に深く心を寄せる人に入学してもらいたいと願っている。しかし、アンケートの結果を見る限りでは、必ず

しもそうはなっていないようである。日本の文学や文化に関心、興味があるかを尋ねた最初の三項目で、11年度から12年度にかけて、男女とも大きく数を減らしているのが気になるところである。この数値がさらに小さくなっていけば、やがては大学での授業の成立の危機（さらには専攻の存在意義の喪失）ということにも繋がりかねないだろう。導入教育にも大いに工夫が必要になってくる所以である。「国語という教科そのものが好きである」という項目を選ぶ学生が微減し、逆に「理科系が苦手だから」という消極的な理由でこの専攻を選んでいる者が増えている。特に男子にそれが目立っており、この結果は我々が実際に授業などで彼らに接した時の印象に合致するものである。一方、将来の進路を考えて、日文を選んでいる者がずいぶん増えている。この専攻に直接的に関係する進路といえば、教職や司書などであろうが、言うまでもなくいずれも狭き門である。それでもこれだけの数があるということは、就職難の現状を考えると、カリキュラムや指導方法を改善するなどし、彼らの希望を叶えるべく具体的な方途を探っていかなければならないだろう。いずれにしても専攻の根幹に関わるところに関心の薄い学生が増えていることは確かであり、そういう者たちにいかに向き合っていくかというのは、喫緊の課題として認識する必要がある。

4　大学生活に何を期待しますか。

2011	男	女	合計	2012	男	女	合計	11男	12男	11女	12女
友人や先輩、後輩、先生などとの交流	16	34	50		24	19	43	55.2%	51.1%	72.3%	67.9%
大学での学習や研究	16	26	42		17	12	29	55.2%	36.2%	55.3%	42.9%
資格の習得など将来への準備	16	31	47		22	15	37	55.2%	46.8%	66.0%	53.6%
クラブやサークル活動	9	16	25		17	14	31	31.0%	36.2%	34.0%	50.0%
ボランティア活動	0	0	0		3	4	7	0.0%	6.4%	0.0%	14.3%
旅行や趣味、アルバイト	10	8	18		16	13	29	34.5%	34.0%	17.0%	46.4%
その他	0	0	0		4	0	4	0.0%	8.5%	0.0%	0.0%

設問４では大学生活に何を期待しているかを問うた。大学側にいる者としては、これまでとは違う人間関係の構築を図ったり、それぞれの関心や考えに従って、大学での研究活動や資格の取得を目指してほしいところである。結果を見ると、男女ともに11年度から12年度にかけて、新しい人との交流や新しい環境での学習・研究、そして資格の取得などに対して、数値を落としている。他方、部活動やボランティア、旅行や趣味、アルバイトに期待している人が増えている。ありていに言えば、大学の内側（知識・教養）に対する興味より、外側にあるもの（実践・有益）への関心がより高いということではないだろうか。ボランティア活動への意識の高まりは、東日本大震災を経た若い人たちの気持ちのあり方としてよく理解できる。また部活動に励むというのも、勉強だけでは得られないものを見つけるという点で、すばらしいことだと思われる。趣味、旅行、アルバイトなども同様である。しかし、このアンケートは複数回答であるから、上の三項目を減らして、これらが増えているというところに寂しさを感じてしまうのであ

る。ここにきて「学生の本分は」などとアナクロなことを言いたいのではない。長引く不況や就職難などの現実をよく知る今の学生たちが、即効性のない（と信じられている）文学部で、さらに何の役に立つのかわからない（とこれまた信じられている）文学の研究に、新入生の段階であまり期待していないのは、ある意味当然であろうかと思われる。専攻としては、入学時の意識のありようを、いかに大学の内側にも向けさせるようにしていくかが課題となるだろう。

5　大学生活で不安に思っていることは何ですか。

2011	男	女	合計	2012	男	女	合計	11男	12男	11女	12女
大学の授業についていけるか	12	31	43		23	13	36	41.4%	48.9%	66.0%	46.4%
仲のよい友人ができるか	17	26	43		15	7	22	58.6%	31.9%	55.3%	25.0%
新しい生活環境に適応できるか	18	19	37		9	8	17	62.1%	19.1%	40.4%	28.6%
自分のやりたいことを見つけられるか	10	13	23		11	12	23	34.5%	23.4%	27.7%	42.9%
就職ができるのか	19	29	48		19	19	38	65.5%	40.4%	61.7%	67.9%
大学生活を送るにあたって金銭的な問題を解決できるか	8	6	14		16	7	23	27.6%	34.0%	12.8%	25.0%
その他	0	0	0		4	0	4	0.0%	8.5%	0.0%	0.0%

これまでとはまったく違う環境での生活となるため、新入生にはいろいろな不安があるだろう。近年は精神的に脆い学生が増えているように思われる。よく言えば繊細とも受け取れるが、激変する環境に対応できず、次第に大学から気持ちが離れていく学生もいるようである。この設問では、彼らが入学時にどういうことに不安を持っているかを尋ねた。12年度では男女ともに「大学の授業についていけるか」「仲のよい友人ができるか」「新しい生活環境に適応できるか」の数値が小さくなっている。これは学生の考えの違いももちろんあるだろうが、実はアンケートを取った時期に原因があろうかと思う。11年度は新入生ガイダンスの時に取ったのが、12年度は春期の授業開始後２週間ほどしてからであったため、上記三項目についての不安は相当解消されていたのだと考えられる。その点を考慮してもなお授業への不安（実際に数回受けた後のアンケートゆえ）を半数近くの学生が持っていることには注意が必要である。「金銭的な問題」の項目が男女とも12年度に上昇しているのは、設問４のアルバイト（期待するもの）のところと連動するものであろう。

6　居住地

2011年

実家	東京	神奈川	埼玉	千葉	茨城	群馬	栃木	長野	福島	山形	新潟	広島	鳥取
男	11	4	3	6	4	0	0	0	0	0	0	0	1
女	12	5	6	5	6	4	1	2	1	1	3	1	0

下宿	東京	神奈川	埼玉	千葉
男	4	0	1	0
女	9	2	0	1

2012年

実家	東京	神奈川	埼玉	千葉	茨城	群馬	栃木	長野	福島	山形	新潟	福岡	三重	山梨	中国
男	18	7	9	4	1	0	1	1	0	1	0	1	1	0	0
女	15	3	3	0	0	0	0	1	0	0	2	1	0	1	1

下宿	東京	神奈川	埼玉	千葉
男	4	1	0	1
女	5	0	0	0

居住地は先に触れたとおり、この２年間を見る限りにおいては、以前よりも首都圏（特に東京）から通う学生が増えている。全国的に地元志向が伝えられているのに加え、各種の要因から首都圏に出てくること（または送り出すこと）への漠とした不安感が広がっているのは否めない。この点については一専攻だけの努力ではいかんともしがたく、大学全体の問題として、安全かつ安心できる生活環境（たとえば防災意識の高いキャンパス、最新設備を持つ寮など）の整備と、さらなる魅力を持つカリキュラムの構築が必須となる。時々の諸条件に左右されない「大学のブランド力」というものが問われると思われる。

さて、これらのアンケート調査から、次のようなことに留意しなければならないだろう。

・必ずしも専攻の実情・内容を見て、ここを選択したのではない。
・学習や研究へのモチベーションが高いとは言いがたい。
・国語（文学・語学）という教科に特に強い関心を持っているわけではない。
・大学で行われる授業そのものへの不安感が強い。

ややマイナス面ばかりを強調しすぎたきらいはあるが、だからといって楽観視できる状況ではもちろんない。専攻ではこれらの実情を踏まえてどのように授業やカリキュラムを作り上げる必要があるだろうか。

３　「日本文学・文化入門Ａ・Ｂ」という授業

入学時からの２年間は主に一般教養と外国語の学習に費やされ、３年次以降に取り組むことになる専門分野の学習は、一部の授業科目で接するのみである。本専攻では、３年次の４月に行われるゼミ決定に先立ち、２年次の１月に各ゼミの内容についての説明会を行っている（教育効果を高めるために、特定のゼミに集中することのないように、学生の希望を鑑みながら、ほぼ均等になるよう人数を調整している）。説明会は上級生が企画・主導するものである。ゼミの実態や活動を伝えるという面では有効に働いているが、しかし、それだけではどのような教員がいかなる手法で研究し、それを授業に生かしているかが、今ひとつよく伝わらない。もちろんその教員が１・２年次生に向けての授業を担当していれば（そして学生が受講していれば）、こうした問題は起こらないのであるが、「日本文学・文化入門Ａ・Ｂ」（以下「入門」と記す）の授業を立ち上げる以前は、ゼ

ミに所属して初めてその教員を知ったということも、ままあったのである。

自分の所属する専攻にどんな教員がいて、いかなる研究を行っているのか、さらにゼミ（演習）ではどのようなことが行われているのか。専攻の教員はこうしたことを大学に入学した初年度に知らせる必要を強く感じていた。先のアンケート結果からわかるように、さほど国語（日本文学・日本語、さらに日本文化）に関心を示していない学生が一定数以上存在する現実を考えれば、基礎的な知識の習得と日本文学や日本語、日本文化の全体像の把握、さらにはそれらの研究法を知ることを目的とした授業を用意する必要があるだろう。このような認識から新たに立ち上げたのが「入門」という授業である。初年度は2008年度で、今年で５年目となる。

「入門」は、ゼミを持つ専任教員が分担して講義を担当するオムニバス形式の授業である。日本文学・文化専攻には、上代・中古・中世・近世・近代Ａ・近代Ｂ・現代・日本語・比較の九つのゼミがある。このうち上代文学と現代文学は非常勤講師が担当しているため、残りの専任教員七名が春期と秋期に分かれてこの「入門」を持つことになる。平成24年度の授業内容をシラバスで確認すると、次のようなキーワード、術語が居並んでいる。日本文学・文化専攻の学生が基礎を学ぶにあたって、大切な手がかりを得るものばかりと言えるだろう。

今昔物語集・軍記物語・女性論・民俗学・宗教学・能・歌舞伎・芥川龍之介・映画・今様・事典・辞書・宮澤賢治・テクスト・作家・干刈あがた・庄野潤三・尾辻克彦・益田みず子・原稿用紙・随筆・思想・和歌・物語文学・役割語・方言・文字・文法・現代アート

古代から現代までの文学や文化事象を学際的な観点で学ぶことは、学生にとっても広い視野を得るきっかけになると思われる。一つ間違えば深みのない総花的な内容に堕する危険性ももちろんあるが、前節で確認したとおり、この方面へのリテラシーやモチベーションにやや欠けるきらいのある今の新入生には、こうした広範な内容で知の体系を示すことが肝要かつ不可欠であろう。これまでの学校生活で親しんできた「国語という教科」の延長線上ではない、違った切り口から日本の文学や文化を見ることができると考えている。なおここでは個別の授業の実際までは触れることができない。稿者が担当した「入門」の授業の一部が、国士舘大学の公式サイトで紹介されている。アドレスを付しておくので、ついて見られたい。

http://www.kokushikan.ac.jp/tagblocks/ReportLetters/news/Cat08/0000001468.html（2008年度「日本文学・文化入門Ｂ」担当者：中村）

なおこの授業の評価は、各教員がレポートや課題を独自に課し、それをもとにして個別に算出した成績を持ち寄っている。統一したペーパー試験を行うことがなじまない授業形態なので、当面はこの方法を続けていくことになるだろう。

4 「日本文学・文化入門」に関するアンケート調査

平成23年度末に「日本文学・文化入門」の授業についてのアンケート調査を行った（2012年１月26日実施）。対象は日本文学・文化専攻の１年次生（当時）である。回答者数は男子27名、女子47名の計74名である。以下にその内容と結果、および考察を記すことにする。

日本文学・文化専攻　１年生アンケート

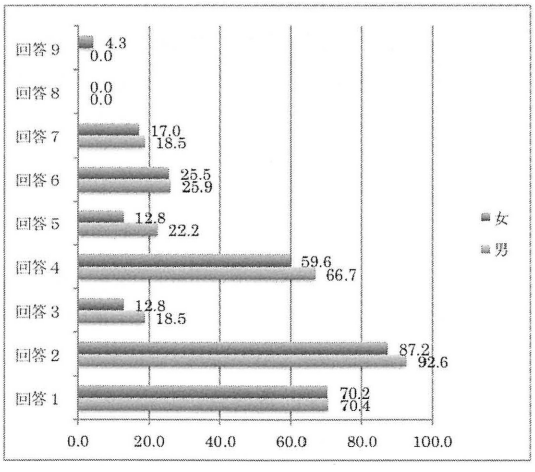
今後の日本文学・文化専攻での学習環境や生活をよりよいものにするために、いくつかの項目について答えて下さい。あてはまるものに○をつけて下さい。

水曜日に開講されていた「日本文学・文化入門Ａ・Ｂ」について

Ａ　１年間受講してどういうことを感じましたか。該当するもの（いくつでも）に○印を付けてください。

１（　　）日本文学・文化専攻で学習する概要（全体像）が理解できた。
２（　　）日本文学・文化専攻の専任教員を知ることができた。
３（　　）オムニバス形式より関心のある分野だけを学びたい。
４（　　）３年次以降のゼミ選択（卒業論文）の参考になった。
５（　　）具体的に専門で研究したい分野が見つかった。
６（　　）少人数で学びやすかった。
７（　　）友人がつくりやすい。
８（　　）試験を実施してほしい。
９（　　）その他（　　）

Ａ	男	女	計
回答１	19	33	52
回答２	25	41	66
回答３	5	6	11
回答４	18	28	46
回答５	6	6	12
回答６	7	12	19
回答７	5	8	13
回答８	0	0	0
回答９	0	2	2



設問１は「入門」の授業そのものに関する調査である。教員側は回答の１、２、４あたりをこの授業の立ち上げの主たる目的として考えていた。まず回答１「日本文学・文化専攻で学習する概要（全体像）が理解できた」では男女とも七割が、回答２「日本文学・文化専攻の専任教員を知ることができた」はおよそ九割が丸印をつけており、当初目論んでいたことへの効果がよく現れていると、ひとまず読むことができる。狭い範囲のことしか知らなくて、そこを唯一の拠り所としてなんとなくゼミや専門を決めてしまうことの多かったこれまでのあり方より、生産的かつ計画的に２年次以降の学習、研究を続けていけるものと思われる。回答４「３年次以降のゼミ選択（卒業論文）の参考になった」も半数を越える六割程度の学生が「参考になった」としており、この点についても一定の成果を上げているとおぼしい。

一方、回答１の残り三割の学生が感じているのか、回答３「オムニバス形式より関心のある分野だけを学びたい」に、男子で約18%、女子で約13%が印をつけている。これはある分野に強い興味や関心を寄せているゆえと取るか、あるいは興味のないものを勉強したくないと取るか、難しいところである。前者であれば、勉学に対する意識の高さとして尊重することができる。しかし、後者だとすると、前節に見た入学時の無関心さが１年間の授業を経てなお残っているということになるだろう。こうした状態のまま専門に進んでも、望ましい成果は得られない。ゼミ選択の際の希望票に記載されていることなどに留意して、その後の指導を考える必要がある。また回答５「具体的に専門で研究したい分野が見つかった」は10～20%程度であり、まだこの段階ではほとんど決めることができないことがわかる。オムニバス形式の「入門」の授業は、この専攻のインデックスとして使ってもらえばよいのであるから、この段階（１年次終了）で数値の低いことを悩む必要はないだろう。

回答６「少人数で学びやすかった」、回答７「友人がつくりやすい」は二割前後であり、案外少ないものとなった。学年を三～四で分けているいるので、各クラス約25名程度であったのだが、その点での効果というのはあまり感じなかったらしい。もっとも日文の学生は総じてまじめで物静かな者が多く、大教室でもさほど授業の雰囲気は変わらない。それを鑑みれば、この数値もさもありなんと納得できるものである。回答８「試験を実施してほしい」は男女ともにゼロであった。

次に「入門」の授業内容についての設問を見ることにする。

B　同じく「入門」の授業に関して、あてはまるものに○印をつけてください。

１　内容の理解　→　理解できた　普通　理解できなかった
２　難　易　度　→　難しい　やや難しい　普通　やや易しい　易しい
３　満　足　度　→　満足　やや満足　普通　やや不満足　不満足

まず授業の内容への理解について、男女を合わせて「理解できなかった」という回答は１名だけであった。他は「理解できた」と「普通」がほぼ半数ずつとなっている。もとより「入門」という授業の性格から、基礎的な知識や研究方法の習得を目的としていた。とはいえ、決して平易すぎる内容にはしていない。近頃は基礎学力の不足している大学生に、中高レベルの内容の授業をすることを売りにする大学が現れている。「親切丁寧」「低レベル」と評価の分かれるところであるが、その是非はここでは論じない。我々の専攻では、そのような方針は採らず、あくまでも日本文学や日本語を学ぶ大学生が身に付けるべき知識や教養を扱って、この結果となっている。

Ｂ－１	男	女
理解できた	11	23
普通	15	24
理解できなかった	1	0

Ｂ－２	男	女
難しい	1	0
やや難しい	4	9
普通	19	36
やや易しい	2	2
易しい	1	0

Ｂ－３	男	女
満足	5	6
やや満足	11	20
普通	8	18
やや不満足	3	3
不満足	0	0

回答２はそうした内容に対して、どの程度難しさを感じたかを尋ねている。これは「普通」が最多となり、「易しい」と「難しい」に少し印がつけられている。啓蒙的な性格の強い授業であり、７名の教員が日本文学と周辺領域を知るために設定した授業内容はおおむね妥当であったと判断できる。なお今回のアンケート調査では具体的にどこに難しさや易しさを感じているかは問うてはいない。提出された課題やレポートの出来具合などから適切に判断すべきところである。

回答３はこの授業への満足度を尋ねたものである。５段階のうち、男女ともに「やや満足」が最も多く、ついで「普通」「満足」となっている。「普通」も含めれば、全体の九割以上の学生が「入門」の授業を肯定的に捉えていると判断する。もちろんこのままでよいということではなく、細部について、あるいは大枠のあり方などにも継続的に検討を加えていく必要はあるだろう。

５　専攻の取り組み

本稿では、日本文学・文化専攻の新入生の現状の報告および彼らに対する導入教育に関する考察を、主にアンケート調査から行った。専攻では「入門」の授業をカリキュラムの中でどのように位置づけ、機能させるか、毎年のように話し合いが持たれている。年々変わっていく新入生の気質や興味、関心、さらには学力などを鑑みながら、効果的なものになるよう柔軟な運用を行っていきたい。なお日本文学・文化専攻では、2009年度より新入生同士の親睦を深めるために春期学外研修を行っている。これまでに東京国立博物館や上野恩賜動物園、隅田川川下り、東京江戸博物館、浅草などにでかけている。まったく知り合いのいない環境に置かれた不安感や孤独感を解消する一助として、友人関係を築くのに役立っているようである。またこの学外研修は、初めて各ゼミに所属することになる３年

次生の春にも催行している。いずれも上級生が行事の手伝いに入っており、学年を越えた交流も深められている。他には専攻の伝統として続けられている秋の国文学会大会、冬の歌舞伎鑑賞などの行事もある。こうした機会を通じて、専攻内部の縦横の風通しを良くし、有益な情報を交換したり、共有したりということがより盛んになることを期待している。大学の設備面の問題から、学年を問わず、専攻として集まる場のないのは残念なことである。法人の言う「愛校心の醸成」のために最も重要なことは、人と人の繋がりであろう。専攻としてはこうした行事をその機会として考えたい。

受験生に主体的に選ばれる専攻となるために、FDの取り組みとしてさらなる課題や問題点を洗い出しに努め、それを克服する術をこれからも考える必要がある。広くご意見ご批正など賜りたく思う。